解答はすべて解答用紙に記入せよ。

1

次の文章を読んで、問一～問五に答えよ。

一般の正倉院展で、有名な銀の大壺が出陳されていたが、私は以前に見た記憶とあまりに違うその光沢の汚染に眼を疑った。この壺は一面に狩猟文や唐草文を毛彫して燦然と輝いていた筈であった。今それがどんよりと梅雨空のように曇って、文様も見分け難くなっている。自動車の排気ガスによる汚染だと言う。あの素朴な校倉造の倉のなかで、千年の間輝き続けていた光沢が、ここ数年のあつという間に文明の害に浸潤されてしまったのである。眼に見えぬ汚染は、おそらく正倉院の他の宝物をも、すでに侵しているであろう。私たちの文化財に対する関心の増加と享受とが、そしてそれを容易に可能なものにしようとする熱意が、文化財の美を滅す兇器そのものとなっているのだ。

京都奈良のもろもろの文化財は、いずれも多かれ少かれ、銀の大壺と同じ害を蒙っている。いや、なかには進んでその害を招くことに努力しているかのごとき保有者も少くない。古都を訪れる度に激しくなつてゆく観光攻勢に、すでに私は恐怖感を覚えるほどだ。文化財に対する文明の汚染の総攻撃。寄せては返す観光客の人海のなかに、寺院も仏像も障壁画も、ただ為すすべも知らぬ裸身をさらしている。砂塵を捲上げ、床を踏鳴らし、サーカスカ見世物でも見物するような眼付で殺到する群衆を見ると、文化財はまるで刑場に曳出された囚人のようである。私は誇張しているのではない。古都の守はもう手遅れだという悲痛な声は、それら群衆の間ですら聞かれるのである。

三笠温泉とドリームランドが出現したとき、これ以上古都の美を汚すことはさせまいと誰もが思った。しかるに、万葉ドライブ・ウェーが走り、奈良県庁が建つ。京都では、比叡山や東山の観光道路ができ、コンクリートの観音が出現、あらゆる非難を浴びながら遂に京都タワーも聳え立った。それらは、美を滅ぼすことに現代がいかに絶好の条件に恵まれているかの、誰の眼にも疑いようのない明証である。私たちはこのフアシズム的暴力の前に、まざまざと美を守ることの難しさを思い知らされたのである。

この暴力は何を示すのか。古都を守る政治的良心の欠如。国民の自覚の乏しさ。商魂の逞しさ。資本主義社会の罪悪。その通りだ。しかし、何よりも大きく重く私たちにのしかかってくる実感は、これが現代文明というものの特質だ、という認識ではなからうか。

誰も文化財を破壊しようなどとは思ってはいまい。みんな古美術を愛し古都の風光に憧れているのである。生活を豊かに幸せなものにするための手段として、人びとは文化財に接しようと思むのである。文化財は一部の特権階級や学者に独占されるべきものではなく、ひろく大衆に公開されなければならない。誰もがそれを見る権利があり、学び楽しみそれぞれの文化水準を高め、情操を涵養する自由を与えられている。文化財は大衆のものである。そういう現代の文化論が掲げる錦の御旗が、理屈は尤もだがもう少し注意して方法を考えようなどという意見を無視してしまつて、寺の門を押開き、高々と塔を押建て、バスを連ねて群衆を送りこむ。寺を特売場のような人波に委ねる僧侶も出れば、デパートに目白押しに文化財をチンレツする展覧会が栄える。そうすることが、現代生活を大衆に享受させ文化を向上させるもつともよい手段だと考えざるを得ないところに、現代文化の悲劇的な特質があると私は思うのである。

勿論、文化財の保存保護についての国家的な施策は行われている。保存設備、解体修理、補強復元などのあらゆる手段をコウじて、不十分ではあるけれども一応努力はされている。けれども、この善意の努力すら、必ずしも文化財の美を守ることにほならないという矛盾も、ここで指摘しておく必要がある。

科学的な修理の方法は近時極めて発達した。赤外線透視、機械測定、化学薬品、学術研究などの手段によつて、文化財を原初の姿に復元し永續性を与えることも可能になったが、その復元修理によつて美を損い、生命を奪つてしまう結果になった例が決して少なくないのである。法隆寺金堂壁画の焼失は、不注意による不運な出来事であったとしても、たとえば醍醐寺五重大塔のごとき完全な復元修理が、あの塔の美しさを一変してしまつたのを見る場合、私たちはその保存措置を喜んでいいのかどうかに戸惑うではないか。

文化財というものには、自然の年月がジョウセイした美しさが付加わっている。年月を経たことが、原初の姿よりはるかに美しく文化財を育てていることが多い。今日の感覚がその変化した美を美と感じるならば、強いてそれを原初の姿に復元することは意味がないし、またいかなる精細な科学的方法をもつてしても、正確な復元などということは不可能なのである。私は、現在の復元修理という作業が、調査方法や復元技術やある学説の優越性を立証するために、文化財を実験台にしているように感じることがしばしばある。

文化財の保存が、その美を保存することにつねに一致するとは限らない。これまた現代的なひとつの矛盾である。誤解を恐れずに言うならば、形あるものは必ず滅びて行く自然の成行に従つて、できるだけ自然に滅びて行くように手を添えるのが、文化財の美を保存するほんとうの仕事ではないかと思うのだ。

古都や文化財を守る方法は、手遅れではあつてもまだ考えることができようし、私たちのそれぞれが考えなければならぬことでもある。しかし、いったい私たち自身において、美に対する心のありかたは果たして正常であり得ているだろうか。

美を鑑賞するということ、そのこと自体への懷疑は今は何うまい。美は鑑賞の対象だとする習慣が私たちの現実なのだから、その鑑賞における心のありかたに問題を限ろう。いま眼の前に、一体の像、一枚の絵、一個の品、何でもよい鑑賞の対象があつて、私たちはその前に立つ。何の予備知識も解説もないそれだけのものを眼の前にしたそのとき、果して私たちはそこに素直に美しさを感じることができているかどうか。美

学力検査問題「国語」(その二)

(2023 一般 I A)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

をただ美として心に映すことができているかどうか。このことに自信のある人はきわめて少いと、私は考えている。

私たちは不安になる。眼前のものが何という名称で、何時代に誰が作ったもので、何のために作られて、どういう美的性質を持ったもので、誰がどんな風にもその美について語っているか。おそらくそういう質問で心をいっぱいにして手がかりを求め、美そのものに直接に対面することを忘れていたのではないか。

現代は解説の時代である。古美術に関する微に入り細を穿った解説の氾濫は、いつしか私たちから、ひとり見てひとり感じ、ひとり想い考える習慣を奪ってしまった。見ることもまず知ることが大事で、知識に従って眼を働かせるといふ本末顛倒が常識となってしまうている。

知識がなければ見ることができなくなった現代人は、美はわからないと呟く。わかるわからないの対象では美はない。美は感じるものであり、感じて心で語り合う対象である。時代や作者や様式がわかることと、そのものの美しさを感じることは全く別のことだ。だが、知識に全幅の信をおく現代人は、このことを混同しているばかりか、わかることがすべてだと信じきっている。美はもう心には映らず、頭のなかで加減乗除されるだけだ。

この現代的鑑賞態度から逃れるのは非常に難しい。一般がそういうフウチヨウに完全に馴染んでしまっているし、感受性が知識に曇らされることを後悔しないのが文明の進化への同調を意味するからである。言換えれば、現代文明を確実に進歩発展させるためには、人間は心を用いることをできるだけ抑制し、頭を全力回転させることを強いられるのだ。美の鑑賞に関してのみこの宿命を変えることはできない。こうして私たちは、私たちの自身の変質によっても美を失いつつある。魂の対話の対象として、心の交流の相手として文化財を位置せしめなくなれば、たとえその形骸が修理に修理を重ねて眼前に保存されていようと、もはやそれは一個の石、一片の木、一枚の紙や布きれと異ならないのである。

文化財の保存保護とは、実は私たち自身の心の保存保護のことではないのか。しかし私たちは、そういう心掛を時代遅れとせざるを得ない生きかたを強いられている。あるいは進んで時代遅れにしようとしたがる。現代に歩調を合せ、文明の進歩に協調すればするほど、美から遠ざかり、美を害い、美を失って行く結果になる。ことにここ数年の一般の趨勢は、その成行にひときわ拍車をかけつつあると言わねばなるまい。

(水尾 比呂志、『現代評論集』「美の終末」より)

※問題作成のため、漢字のふりがなを省いた箇所がある。

問一 傍線部①～⑤について、カタカナを漢字に直し、漢字には読み仮名を付けよ。なお、送り仮名がある場合はひらがなで記せ。

- ① チンレッツ ② コウ ③ ジョウセイ ④ 氾濫 ⑤ フウチヨウ

問二 波線部A「錦の御旗」、B「微に入り細を穿った」について、本文の意味として適当なものを、ア～エからそれぞれ一つ選び、記号で記せ。

A 「錦の御旗」 B 「微に入り細を穿った」

ア 高尚な考え ア 多様な考えを取り入れた

イ 大義名分 イ 独創的な視点を持った

ウ 時代の主流 ウ 細かな点にまで行き届いた

エ 普遍的な意見 エ 専門的見地に基づいた

問三 傍線部(1) 「私たちはこのファシズム的暴力の前に、まざまざと美を守ることの難しさを思い知らされたのである」とあるが、「ファシズム的暴力」が生じる原因について述べている一文を抜き出し、はじめと終わりのそれぞれ八字を記せ(句読点を含む)。

問四 傍線部(2) 「けれども、この善意の努力すら、必ずしも文化財の美を守ることにはならないという矛盾も、ここで指摘しておく必要があるろう」について、「矛盾」の内容を六十字以内で記せ。

問五 傍線部(3) 「こうして私たちは、私たちの自身の変質によっても美を失いつつある」とあるが、「私たちの自身の変質」とは、どのようなことか。五十字以内で説明せよ。

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

2

次の文章を読んで、問一～問八に答えよ。

上野の丘陵からは、東京の町の、涯^{はて}しなく広がる姿が見える。明治の出発とほとんど出生を共にする幸田露伴は、すぐ近くの下谷^{したや}に生まれ谷中に住んだ。露伴は、上野の山に登って新しい国家の首都となった旧江戸の町を見渡しながら、新しい国家の行く末をまぶしく見つめようとしていたにちがいない。

A

にふれて天王寺の塔を仰ぐことも日常だっただろう。

塔は小説『五重塔』で感応寺の塔として登場する。

小説『五重塔』が書かれた明治二十(一八八七)年のころ、日本は大揺れに揺れていた。いままで世間の末端にいた民衆が、民権に立つて国を造るといふ、常識^①とはまったく逆の思想が入ってきたからである。

一方に国家の一員でありながら個人の自由を尊重するという新しい思想もあった。個人、自由、民権などという耳なれないことばが国家とどう調和すればよいのだろう。

国造りの議論を潮騒のごとく耳にしながら、やがて知識人として思想の一翼をになうようになる露伴は、ジャッカン^①二十四歳の輝くような瞳を、塔上の水煙^{すいえん}に向けていただろう。

関東一高いといわれる塔は、整然と層をかさねて空中にそびえ立っていたはずである。

小説『五重塔』は、こうして塔を仰ぎ見る経験から紡ぎ出されていったのではないか。

そこで、この小説の主人公をだれと考えればよいのか。小説でもっとも有名な個所は巻末、のっそり十兵衛が竣工直前の嵐の中でランカン^②をつかむ情景であろう。

大工・十兵衛はここへ到るまでも存分に我を通して棟梁の源太をしりぞけ、その上で工事に成功してみなの喝采^③をうける。世の習慣も身分も周囲もあつたものではない。くつきりと姿を現わしながら行動しつづけるあたり、個人尊重の近代の、みごとな主人公のようである。

しかし我執^{がしゅう}の強さだけが後味となって残る。しかも小さい細工物ならいざ知らず、巨大な造塔ともなれば、多岐にわたる部分部分は分業に委ねたはずで、この全体の差配こそ、大事なのではないか。

しかし小説は意図的に、そのあたりを臙化^{みょうか}させて、職人氣質^{かたぎ}へののめり込みばかりをきわ立たせる。つまり十兵衛はどうやらひとつの「個人」を示す役をあたえられた登場人物にすぎないらしい。

その反対が、すでに棟梁として重きをなしていた川越の源太である。彼はその統率力といい、作中で察せられる人格といい、棟梁としての貫禄^{くろく}は申し分ない。その上、以前からの工事のいきさつを突き崩して十兵衛という思わぬ闖入者^{わんにゅうしやう}が現われても譲歩しつづけ、ついに自分は大工仕事の担当を断念する。

十兵衛が我を通せば通すほど、源太の人柄が大きさを増す仕組みになっている。

十兵衛にまかせたといっても、こまごまとした分業の職人を動かしたのは棟梁の源太にきまっているし、しいていえば十兵衛が工夫したという雛型^{ひな}の実現を、十兵衛にさせてやるだけの、譲歩だったとさえ言える。

読者にとっても源太の好感度は抜群だろう。この粹^{いき}な振舞いは、江戸町人が久しく至極の美しさとしてきたものであった。

しかし、源太は嵐の中では塔のまわりを徘徊^{はいかい}する「怪しき男一人」であった。いわば黒衣^{くろい}の役があたえられていたことも、歴然としている。組織をまとめる長^{おさ}、他人を受けいれながら仕事を完成させていく力量の持ち主、そんな役を蔭^{かげ}にまわつて果たすが、源太である。

そこで、細かな筋立てから大きく目を転じて、中空に美しく完成されようとしている塔を「国家」の暗喩^{メタファー}と見てはどうだろう。そのことで作者の、みごとな配役ぶりを見ることができると。

小説の中軸をつらぬく人物として姿がきわ立つのは朗田上人^{しやうたんとん}である。上人とは日蓮宗での呼称で、すでに天台宗に改宗した当時の天王寺に、上人がいるはずはない。そんな飛躍をおかしてまで、作者は尊い「上人」の名にこだわったのである。

十兵衛は上人に感涙^④を流して仕事にはげむ。源太も上人の前で少しずつ自分の立場を後退させる。まさに上人を中軸をつらぬく主役とし、十兵衛と源太とを輔翼^{ほよく}としてしたがえる構造によって、造塔は完了した。

この構造を、息を B ばかりに鮮かに示す個所が終末である。露伴はつぎのように記す。

上人は書いた。

江都の住人十兵衛これを造り、川越源太郎これを成す

と。

所詮^{しよせん}、造ることに執着したのが十兵衛だった。そして主役をおり黒衣となった者こそが、成す者であるとは。

露伴は知っていたか否か、「十兵衛作」として小説に描かれたモデルの、寛政三(一七九二)年再建の塔には、日光東照宮にも先んじて倒壊を防ぐ懸垂式の心柱が用いられていたという。のみならず十兵衛が造ることになった塔は、直前に改修中、倒れたらしい。

学力検査問題「国語」(その四)

(2023 一般 I A)

解答はすべて解答题用紙に記入せよ。

だから十兵衛は、これらの倒壊に対する新技術をもって臨み、新五重塔の完成によって新技術は、テストに成功したことになる。高さも増上寺の塔を抜くというから、今ふうにいえば最新のハイテクの成果であった。

しかし技術は「**I**」にとどまることを上人は明言した。畢竟の成果は「**II**」にある。読者はこうして我執と技術の限界を、まざまざと上人から示されて、読書をおえることとなる。

飽くことなく五重塔を仰ぎながら、露伴が見ていたものは、この成すことの尊さだったのではないか。この結果、成さしめたものとして、^{*}脇侍をしたがえる本尊のごとくに上人を据えたのだろう。

そしてわたしは、^⑤露伴が新しい日本の国造りを造塔に加託したと思えてならない。折しも明治政府は「国会」を設けることをきめ、その準備を進める中で新聞「國會」も発行された。この「國會」紙に露伴の『五重塔』は^⑤ケイサイされた。だから朗円上人のさらにその上には「上御一人」がいらっしやる。

露伴自身もいま、文学の書き手として作家の道へと出発したばかりである。

しかし、造るのではない。造ってはいけない。成さなければならない——そういう露伴の^⑤呟きが、いまにも聞こえてきそうになる。

(中西進、『文学の胎盤』より)

※ 輔翼 たすけること。

懸垂式の心柱 塔から吊り下げられ、土台に固定されていない心柱。

両脇侍 仏の左右に侍して仏を助けるもの。

加託 仮託。

上御一人 天皇の尊称。

問一 傍線部①～⑤について、カタカナを漢字に直し、漢字には読み仮名を付けよ。

- ① ジャッカン ② ランカン ③ 喝采 ④ 感涙 ⑤ ケイサイ

問二 傍線部(1) 「常識」とあるが、ここでは具体的にはどのような考え方か。「という考え方」につながるように、二十字以内で説明せよ。

問三 傍線部(2) 「関東一高いといわれる塔」が指すものを文中から五字で抜き出せ。

問四 傍線部(3) 「この小説の主人公をだれと考えればよいのか」とあるが、この小説の主人公は誰であると筆者は考えているか。文中から抜き出せ。

問五 傍線部(4) 「他人を受けいれながら仕事を完成させていく」とあるが、具体的には源太がどのようなことを指しているのか。四十字以内で説明せよ。

問六 空欄A、Bに入る最も適当な言葉を、それぞれア～オから選び、記号で記せ。

- A ア 粹 イ 目 ウ 笠 エ 折 オ 手
B ア 吐く イ つく ウ 切らせる エ のむ オ 殺す

問七 空欄I、IIに入る最も適当な言葉を、それぞれ文中から抜き出せ。

問八 傍線部(5) 「わたしは、露伴が新しい日本の国造りを造塔に加託したと思えてならない」とあるが、幸田露伴は国造りについてどう考えることが重要だと考えていたのか。筆者の解釈を、「個人」という言葉を用いて四十字以内で説明せよ。

学力検査問題「国語」(その五)

(2023 一般 I A)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

3 次の文章を読んで、問一～問四に答えよ。

ものごとは継続していると、いつしかなれてきます。

なれてくると、刺激がなくなり、やがて飽きてきます。

「なれる」とひと口に言っても色々あります。「慣れる」や「馴れる」は、習熟という意味をもつからなのでしょう、一般にはポジティブな意味で使われるようです。

ただ、充分に^①エトクし、上手になることは良いことですが、私は何事も慣れてくると逃げ出したくなります。この先、もう何も起きない気がしてくるのです。

つらいことであっても、悲しいことであっても、いずれは慣れてきます。母を家で介護しているときもそうでした。出口の見つからない苦しい日々、最初のうちは悲嘆に暮れ、ときには運命を呪ったりもしました。それが不思議なことに、毎日つづく苦しい日々もやがて日常になり、しまいに慣れてきてしまうのです。このときばかりは「慣れる」に救われた気もしましたが、といって、それで問題が解決したわけではなく、状況が改善したわけでもありません。ピリピリ張り詰めていた精神が弛んだだけなのです。

友人に、端から見たらとても刺激的な人生を送っている人がいます。

会社のオーナーですが、日々の経営はヘッドハンティングをしてきた部下に任せて、会社の行方を^A左右することだけは自分で決定しています。昔から書画、彫刻、建築、音楽など、ほとんどすべての芸術に通じ、師について習い事にも精を出しています。書画骨董を蒐集し、観たい人や借りたい人の要望にも応えています。^②キショウな品が手に入ると、新しい体験に胸躍らせながら、私にも見せてくれます。

「モダンアートの講義を受ければ、偉大なる古典とはどういうことで、それに対するモダニズムはどう発生して定着したかが整理できる。そうすると、今まで無関心だった事象に親近感もてる。そういう手順で僕の引き出しが整理され増えていくのを実感します。学究に飽きることはないように思います。数年後の第二期隠居は、アカデミズムを基軸に日常を構成できそうな気分です」

還暦を前に大学院に通いはじめた彼は、こんなふうに^③ホウフを語っていました。それが、少し時間がたつと、もうこんなことを言いはじめるのです。

「大学院も仕事も僕にとっては気晴らしです。人生というものは気晴らしをしているうちに終わってしまうのかとも思います」

たしかに、教授よりも彼のほうがよほど詳しい分野もあり、若い研究者などは彼に教えるを^④コイたいようでした。

彼を見ていると、容易に手に入る物や事は、必ずしも幸せをもたらすものではないのだと思ってしまうかもしれません。それなりの時間やエネルギーや資金を^⑤ツイヤシてこそ、喜びも生まれ、失いたくない気持ちも生まれるものです。何も障害がなく、すんなり自分のものになると馴れてしまうのか、彼はいつも^①退屈しているように見えます。

この春からは、^①最後の手段のような感じで、日本と海外の生活を半々にしたそうです。しばらくすると、近況報告の手紙が届きました。

「僕も元気でいられるのはあと十数年でしょう。過去の大半を失う代わりに、今までの惰性では生きないと決めました。こちらでのほとんどが空白の生活なので、自分の衰えを見つめざるをえませんが、それでも終わりに近づいていることを気晴らしの中で忘れて暮らすよりも、良寛の晩年のように独りでリアルな時間を獲得したほうが、よりよく生きることになるような気がします。自然のリズムに沿った素朴な生活を淡々と、しかし味わい深く送るといふ心境に近づいています」

なにやら達観した物言いですが、それもまたそのうち飽きてくるような気がします。

それでも、^②納まり返った生活をするよりは「これじゃない」「これでもない」と旅をつづけている彼は素敵だと思えます。

思えば、会うたびに彼は、何かを閉じて、何かを始めています。自分の知らない世界に通じる扉を開けては、すでに見知った世界であることに気づいて、飽きたり、失望したり、落胆したり。でも、すぐにまた新しい世界を求めて、次の扉を探しはじめるのです。

還暦を機に、それまでの人生を^B完膚なきまでに閉じる覚悟でケープ岬の荒海に漕ぎ出した月尾嘉男さんのように、私も「なれる」を閉じて、大海原に船を出しつづけていこうと思っています。風いだ海より、時に暗礁に乗り上げても、怒涛の海が好きなのです。

退屈は人生の大敵。今の生活になれてきたなと思ったら「閉じどき」です。

(残間 里江子、『閉じる幸せ』より)

学力検査問題「国語」(その六)

(2023 一般 I A)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

問一 傍線部①～⑤について、カタカナを漢字に直せ。なお、送り仮名がある場合はひらがなで記せ。

- ① エトク ② キシヨウ ③ ホウフ ④ コイ ⑤ ツイヤシ

問二 波線部 A「左右」、B「完膚なきまでに」について、Aは本文と同じような意味で使われるものを、Bは意味として適当なものを、ア～エからそれぞれ一つ選び、記号で記せ。

A「左右」

B「完膚なきまでに」

ア 横断歩道では信号表示のみでなく左右をよく見る。	ア 徹底的に
イ 左右に気を遣う人物の周りには人が多く集まる。	イ 意図的に
ウ 確固たる意思が無いと言を左右にしがちになる。	ウ 強圧的に
エ 降雪期の外出は空模様左右されることが多い。	エ 最終的に

問三 傍線部(1)「最後の手段のような感じで、日本と海外の生活を半々にした」とあるが、友人がそうした理由を、筆者はどのように考えているか。四十字以内で説明せよ。

問四 傍線部(2)「納まり返った生活をするよりは『これじゃない』『これでもない』と旅をつづけている」とは、どういうことか。文中の語を用いて四十字以内で説明せよ。

問一		問二		問三	問四		問五				
①	A	はじめ	復元	美に	とに	知に	とる	失つて			
陳列	イ	私たち	修理	な	な	偏重	この	いる			
									B	ウ	文化
②		の	す	なり	たり	の	お	欄干			
講		文	る	、	自	然	か	民衆は			
									化	財	に
③		に	こ	と	た	の	に	かつさい			
醸成		に	こ	美	成	行	美	国政			
									醸	成	に
④		終わり	な	を	損	い	り	④			
はんらん		な	つ	美	行	に	美	に			
									つ	て	い
⑤		な	い	を	い	に	そ	⑤			
風潮		な	い	を	い	に	の	ない			
									い	る	の
⑤		な	い	を	い	に	の	掲載			
風潮		な	い	を	い	に	の	ない			
									い	る	の

問一		問二		問三	問四	問五	問六	問七	問八
①	弱冠	世間の	天王寺の	朗円上人	大工	人を	A	I	調和
欄干	②	に	という	塔	仕事を	配	B	II	考
③		民衆は	国政	に	かんるい	③			
かつさい	④	国政	に	かんるい	④	かんるい	⑤	掲載	の
④		かんるい	④	かんるい	④	かんるい	⑤	掲載	の
掲載		かんるい	⑤	掲載	の	職	費	や	し
⑤		かんるい	⑤	掲載	の	職	費	や	し
掲載		かんるい	⑤	掲載	の	職	費	や	し

問一		問二		問三		問四	
①	A	探	に	慣	い	世	界
会得	E	求	め	て	退	屈	安
②		稀有	(稀少)	③		抱負	④
抱負		抱負	④	請い	⑤	費	や
⑤		費	や	し	⑤	費	や
費	や	し	⑤	費	や	し	⑤